

コンサルティング事例 02

ウイングアーク1st株式会社

一緒に汗を流してくれるパートナー探しと ディーセントワーク・ラボとの出会い



企業の情報活用と業務効率を活性化させるソフトウェアを提供しており、
21年3月には東証一部への上場も果たしたウイングアーク1st株式会社。

現在、ディーセントワーク・ラボと同社は、沖縄県で農業・果樹栽培を通じた障がい者雇用をおこなっています。
執行役員である吉田 善幸さんと、サステナビリティ推進室で障がい者雇用を担当しておられる鈴木 幹子さんに、
お話をうかがいました。

ご紹介：吉田 善幸さん

執行役員(人財・組織文化&サステナビリティ担当)

Google、adidasをはじめとした外資系企業を中心に様々な企業でHR部門のトップを歴任。2017年ウイングアーク1stに
参画。

ご紹介：鈴木 幹子さん

サステナビリティ推進室/ダイバーシティ雇用グループ

2010年12月ウイングアーク1st株式会社入社。

採用業務から給与系のチームリーダーを担当したのちに、

エンゲージメントグループ(組織環境改善)業務を担当し、現在は障がい者雇用をメインで担当。

農園モデルを採用したいきさつ

DWL船谷 沖縄で障がい者雇用の取り組みを一緒にやらせていただいておりますが、私たちディーセントワーク・ラボにお声がけをいただいた経緯を改めてお話いただけますか？

吉田さん もともとウイングアーク1stでは、会社として「サステナビリティ(持続可能性)」や「ダイバーシティ&インクルージョン」の考え方を大切にしていたんです。一方で、法定雇用率の達成も、企業として必須の条件でした。ただ、私たちのようなIT企業が、首都圏で障がい者をエンジニアやプログラマとして採用するのはとても難しいんです。そもそも同じように採用したいと思っている企業がたくさんありますし、まだまだITの知識・技術を持った障がい者が少ない状況があります。

これまでは、社内で事務作業のサポートのようなポジションで採用をおこなっていました。しかし、結局雇用率は達成できないままでした。悩んだ末、「農園型」の障がい者雇用サービスを契約したんです。

※「農園型」(企業向け貸し農園)サービス
都市郊外にある農園の区画を企業に貸し出し、企業の社員として雇用契約を結んだ障がい者は農業に従事する雇用モデル。

農園モデルで感じた難しさ

DWL船谷 農園での雇用はどうでしたか？

吉田さん 結論から言うと、マネジメントが困難でした。障がい者パート契約の管理者双方の定着やチームとしての一体感を作るのが難しいというのが分かりました。採用から管理までを外部委託していたため、私たちは現場に定期的に訪問するのみでしたし、

DWL船谷 その私たちも、農業のノウハウ・障がい者雇用のノウハウを十分に持っていなかったため、その状況を改善することが難しかったんです。

「これは本当の意味で、雇用した障がい者を幸せにしているのか？」と疑問を感じるようになりました。議論の末に、サービスを解約しました。当時農園で雇用していた障がい者に対しては、

吉田さん 雇用を終了をさせるという非常に申し訳ないことをしました。ただ、当時の状況から、続けていくのは困難と判断したのです。

同じことは繰り返したくない。

「障がい者が幸せに働ける雇用環境」を目指して、自分たちの手で新しい雇用の仕組みを作ることを決意しました。

一緒に汗を流してくれるパートナー探しとディーセントワーク・ラボとの出会い

DWL船谷 なるほど。そこからの流れも教えてくださいませんか？

吉田さん 当時は、雇用の仕組みづくりのノウハウ、雇用のノウハウを持っていなかったため、パートナーを探すところからスタートしました。

求めていたパートナーの条件は2つです。

・私たちウイングアークの理想的な雇用モデルをゼロから作り上げるノウハウを持っていること

・失敗できないので、ハンズオンで深く関わって伴走してくれること

公共機関や、障がい者雇用のコンサルティングを手がけている大手企業にまず声をかけましたが、なかなか条件に合うパートナーには巡り会えませんでした。

たしかに難しいオーダーだったと思います。

しかし、一緒に苦しみ、一緒に喜んでくれるマラソンの伴走者のようなパートナーを切実に欲していたんです。

そんな中、ディーセントワーク・ラボに出会いました。

DWL船谷 ありがたいことに、当時のわかりにくい私たちのホームページを探し当てて、お問合せを頂きましたよね。

吉田さん そうそう。ちょっとわかりにくいサイトでした(笑)

打ち合わせに来てくださった船谷さん・中尾さんは親子みたいでしたね。

しかも代表は娘さんの方(中尾)なのか!と。「面白い法人だなあ」というのが第一印象でした。

DWL船谷 ハハハハ!(笑)
それでは、今のモデルに至るまでの試行錯誤についてもお話をいただけますか?

沖縄で果樹を栽培するに至るまでの試行錯誤

吉田さん ディーセントワーク・ラボは、すでに沖縄でソルファコミュニティ(※)さんとバニラ栽培モデルの立ち上げを行なっていて、障がい者雇用のノウハウだけでなく、農業の知見も持っていらしかった。社内でカフェコーナーを設置するアイデアなど、さまざまなアイデアについてディスカッションしましたが、最終的には農業・果樹栽培へのチャレンジと、まずはバニラ栽培から始めることを決めました。
※合同会社 ソルファコミュニティ:沖縄県中頭郡北中城村で
就労継続支援A型事業所「TEAM VILLAGE(チーム ヴィレッジ)」を運営。野菜の自然栽培と加工販売を手がけている。

DWL船谷 バニラビーンズ(バニラ果実)は、近年供給不足と投機で価格が高騰しています。世界シェアトップのマダガスカル産が、自然災害によって不作になったのです。私たちディーセントワーク・ラボでは、トップパティシエと全国の福祉事業所とコラボレーションしてお菓子作りを行っています。そのパティシエの「バニラを使うことを諦めない」という声からバニラに注目したんですね。

吉田さん 雇用モデルを検討する際には、社内でもたくさん反対の声があがったんです。「なぜ遠い沖縄でやるのか」「利益を出すモデルになっているが、障がい者雇用のために利益は必要なのか?」と。もちろんリスクはあります。でも、本当の意味でのダイバーシティ&インクルージョンや社会貢献として取り組むのであれば、事例に取り上げられるくらいまでやり切りたい。

社内からの反論の一つ一つに、船谷さん達には根気強く向き合ってもらいましたね。「どこでやるのか?」も問題でした。考えた末、沖縄に決めました。すでに船谷さんとも関係が深かったソルファコミュニティさんがいましたし、ディーセントワーク・ラボにソルファコミュニティさんと繋いでいただいたことで、雇用や農業への実質的なサポートをもらえましたから。長い時間がかかりましたが、ようやく会社として意思決定を下すことができました。

ただ、沖縄で農園をやると決まってからも、困難なことがたくさん待ち受けていました。農地を借りようにも、縁もゆかりもない東京のIT企業が突然やってきて、「農地を貸してくれ」なんて言われても、地主の方は呆気にとられるわけですね。

そんな中、彼らとの関係性を構築するところから実際の交渉まで、ディーセントワーク・ラボにどんどん進めていただきました。

鈴木さん 船谷さんには、障がい者の採用面接にも同席いただきましたね。ウイングアーク1st本社でこれまで採用してきたのは、身体障がい・精神障がいの方が中心で、社会福祉士としてたくさんの障がい者と面接をおこなってこられた船谷さんが同席の上で、アドバイスをいただけたので、安心して採用活動を進められたのかなと思っています。

DWL船谷 ありがとうございます。

吉田さん なんか褒めすぎちゃってるよね?歯が浮いてきちゃった(笑)

DWL船谷 ありがとうございます(笑)ホームページにそっくりそのまま掲載させていただきます!(笑)

将来の展望

DWL船谷 まだこの雇用モデルは始まったばかりで「いよいよこれから」という段階ですが、将来の展望や、こうなりたいという理想像についてもお話いただけますか？

吉田さん 最終的には、ディーセントワーク・ラボや、ソルファコミュニティさんの手を借りずに運営ができるようになりたいと思っています。独り立ちといってもいいかな。
本当の意味で、自分たちの手でやれるようになりたい。
そして、沖縄のメディアで「非常に良い就業モデルを東京から来たIT企業がやっている」と取材を受けるような状況が作れたら理想ですね。

あと、これは船谷さんと酒を飲みながら語り合った夢のような話ですが、付加価値の高い果樹栽培のモデルで利益を出せるようになったら、子ども食堂を作ったり、地域に対して利益分を還元できるような活動に繋がっていきつてところまで繋がれると、それが究極のゴールかなと思っています。
ディーセントワーク・ラボには、そこまでは手厚くサポートしていただきたいし、独り立ちできた際にも、ディスカッション(壁打ち)の相手として長く付き合ってもらいたいです。

DWL船谷 もちろんです。ずっと関係は切れませんよ。これからもよろしくお願いします。
最後に、今回の取り組みを通じて「障がい者」「障がい者雇用」の認識が変わったりしましたか？
最後に思うことをご共有いただければ。

鈴木さん とても変わりました。これまで、主に身体・精神の方と働いてきましたが、今回の取り組みの中で、彼らと時間を一緒に過ごす過程で、ちゃんとその人が本当に心から楽しんで「仕事が楽しい」「農業が楽しい」という言葉を心からそう感じていると感じ取れたと思える瞬間がありました。いわば、心から通じ合えたと思えたんです。これは大きかったですね。

吉田さん 私は、認識が変わったというか、気づいたのは日本社会の教育の問題ですね。

教育の流れがまったく違って、最初から「健常者」「障がい者」を分けてしまっています。
そういう意味では、私たちの、沖縄で果樹・野菜を育てていく雇用モデルも本当に目指すべき「ダイバーシティ&インクルージョン」と言えるかどうかは、正直なところ自問自答する部分があります。

ただ、今私たちにできることは、自分たちで雇用した人たちが、長く安心して働いてもらえるような就労環境と、彼らが自立して生活できるだけの給料を払えるモデルを作っていくことです。それが、「障がい者が幸せに働ける雇用環境」を実現する第一ステップだな、と改めて感じています。

DWL船谷 本日はありがとうございました。引き続き、よろしくお願いします！